

令和 3 年 6 月 5 日現在

機関番号：11401

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2018～2020

課題番号：18H05667・19K20871

研究課題名（和文）民主化によるパプア分離独立運動の変容

研究課題名（英文）The Impact of Democratization on Papua Independent Movement

研究代表者

阿部 和美（ABE, KAZUMI）

秋田大学・国際資源学研究所・助教

研究者番号：00822230

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、分離独立運動が続くインドネシア・パプア問題に着目し、民主化が定着したインドネシアの国民統合の実態と課題を検証するものである。本研究の目的は、民主化にともなう政治・経済・社会的環境の変化によってパプア人の帰属意識に生じた変化と、その結果生じた分離独立運動の変容を明らかにすることである。研究の結果、パプアでは、インドネシアの主要都市との交流が盛んな沿岸部都市部と、他地域との交流が乏しい山間部でインドネシアに対する帰属意識に大きな差異が生じ、分離独立運動に対する姿勢にも影響を及ぼしていることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

民主化以前、パプアへの渡航は厳しく制限され、民主化移行も外国人ジャーナリストの渡航が規制されるなど、パプア地域の実態を知るための情報は限られている。必然的に、パプア紛争研究の蓄積は決して十分ではなく、特に日本国内では先行研究が乏しい。パプア地域の現地のネットワークを活用し、一次資料を用いて進められた本研究は、国内のパプア紛争研究を大きく進展させるものである。同時に、本研究はパプアの事例を通してインドネシア国民統合の実態と課題を示すだけでなく、東南アジア地域に残る他の分離独立問題に対しても、分析の一助となることが期待される。

研究成果の概要（英文）：This research reviews the reality and problem of national integration in Indonesia which has maintained political stability for the last decade with the case study of the Papua region. The purpose of this research is to clarify the change which has been brought to identity of the Papuan people and the change of independent movement in Papua as the result of that change.

This research shows how the gap between the identity of the Papuan people live in urban coastal area and that live in isolated mountainous area has been caused, and how the gap has influenced independent movement in Papua.

研究分野：国際関係論

キーワード：インドネシア 分離独立運動 国民統合 パプア 紛争

### 1. 研究開始当初の背景

多くの先行研究において、パプア社会の要求は分離独立であるとされているにも関わらず、現在明示的に分離独立を要求する集団は限定されている。さらに、利権構造の変化によって社会に複数の対立軸が生まれた結果、政治的混乱、経済的低迷、文化的基盤の喪失等複数の要因により、パプア社会が分裂の危機にある。また、パプア地域の政治・分離独立運動・紛争解決の主要アクターの活動拠点を見ると、地理的特徴が見られる。パプア紛争を分析する際に、「パプア人による分離独立運動」を前提としない視点を出発点とすることにより、異なる環境に置かれたパプア地域内の様々なアクターを分析対象とすることが可能になる。以上の背景から、今日のパプア問題を理解するためには、利権構造の変化によって複雑化したパプア社会の構図を再構築する、新たな視点が必要である。

### 2. 研究の目的

本研究は、分離独立運動が続くインドネシア・パプア問題に着目し、民主化が定着したインドネシアの国民統合の実態と課題を検証するものである。パプア地域には、人権侵害や貧困が蔓延している。さらに、民主化によって利権構造が変化中、パプア社会の基底をなす分離独立運動に変化が生じている。本研究では、民主化にともなう政治・経済・社会的環境の変化によってパプア人の帰属意識に生じた変化と、その結果生じた分離独立運動の変容を明らかにする。

### 3. 研究の方法

本研究では、(1)パプア人のナショナリズムがどのように形成されたのか、(2)民主化によってパプア人をめぐる政治・経済・社会的環境にどのような変化が生じたのか、(3)その結果、パプア人の帰属意識にどのような変化が生じて分離独立運動を変容させたのか、以上の3点を文献調査と現地調査によって明らかにする。日本国内で入手可能な文献は限られているため、パプア地域、インドネシア首都ジャカルタに加えて、パプア紛争研究の世界的拠点であるオーストラリアにおける資料収集を実施する。現地調査は、ジャカルタとパプア地域で行い、関係者への聞き取り調査を行う。

### 4. 研究成果

「研究の方法」で示した3点の問いに対する研究結果は、以下の通りである。

#### (1) パプア人のナショナリズムがどのように形成されたのか

パプア紛争は、パプア人の意思を表明する機会が奪われたインドネシアへの併合の経緯と、パプア人の基本的ニーズが充足されない状況が継続したスハルト期の対パプア政策を発端としている。インドネシア政府とパプアの関係に変化が生じようとした民主化移行期に、パプア人アイデンティティが広く共有されて分離独立運動が活性化した。しかし、メガワティ政権がスハルト政権への揺り戻しのような政策を実施した結果、パプアのインドネシア政府に対する根強い不信が根付くとともに、パプア社会を統括するリーダーや組織が不在になり、パプア分離独立運動は分散した。

(2) 民主化によってパプア人をめぐる政治・経済・社会的環境にどのような変化が生じたのか  
特別自治法が導入され、民主化が定着したパプア社会では、エスニック・グループのリーダーがインドネシアの政治システムを利用して利権を得ている一方で、多くのパプア人が、貧困や開発事業にともない生じるコミュニティセキュリティの脅威に晒されている。パプアの多くの地域では、パプアの政治的地位に関する問題よりも、グッドガバナンスや社会開発、そしてコミュニティセキュリティに関する問題が、日常生活を脅かす深刻な問題として存在している。山間部では、スハルト政権期に軍事作戦が展開され、インドネシア政府や国軍に対する不信感が根強い。国内移民との交流も少なく、依然として伝統的な生活様式が維持されている。現在も武装集団と国軍の軍事衝突が見られる山間部では、インドネシア人アイデンティティの受容が進んでいない。パプア人と国内移民による経済社会共同体が成立し、インドネシア人アイデンティティが広く受容されつつある沿岸部の都市部と山間部には、分離独立に対する意識に大きな影響を与える差異が生じている。

(3) その結果、パプア人の帰属意識にどのような変化が生じて分離独立運動を変容させたのか  
民主化以降に展開した分離独立運動は、沿岸部の活動家が率いる運動と、山間部の活動家が率いる運動に二極化した。前者は、パプア社会が直面するグッドガバナンスや社会開発、そしてコミュニティセキュリティに関する問題を吸い上げ、パプア人の分離独立よりも人権保護と平和の実現を優先し、パプアに居住する国内移民を含めた、より広い運動への発展を目指している。他方で、後者は、パプア人の分離独立を最優先し、武装集団との連携を通して、より急進的な活動を展開して国際社会の関心を高めることを目指している。前者の活動は、ウィドドとテバイを中心と

する JDP が牽引していたが、両者の死去と、インドネシア政府の消極的な姿勢により、求心力を失っている。後者は、オックスフォードを拠点とするディアスポラであるウェンダとの連携を通して、国際社会への発信力を高めている。ダイアログ運動を展開していた平和的な紛争解決を求める JDP が求心力を失っている状況の中で、繰り返されるパプアの人権問題に不満を募らせるパプア人の若者たちは、ウェンダの活動に触発されて、KNPB が率いる急進的なデモに動員されている。その様子はウェンダの広報活動を通して国際社会に発信されて、国際社会の関心を高めるといった仕組みが生まれている。結果として、パプア分離独立運動は収束するどころか、国際社会に発信される分離独立を最優先にした運動に関する情報は、むしろ増加しているのである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 阿部和美	4. 巻 -
2. 論文標題 インドネシアにおけるパプア紛争—分離独立運動の変容	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 博士学位申請論文（早稲田大学）	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 阿部和美	4. 巻 5
2. 論文標題 インドネシア・パプア問題におけるメラネシア地域の役割 メラネシア・スピアヘッド・グループのメンバーシップ問題をめぐって	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 グローバルガバナンス	6. 最初と最後の頁 98, 112
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 阿部和美	4. 巻 25
2. 論文標題 民主化時代インドネシアの開発：パプア地域開発における「人間中心の開発アプローチ」の欠落	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ソシオサイエンス	6. 最初と最後の頁 19,30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 阿部和美
2. 発表標題 ポスト権威主義体制下インドネシアにおけるパプア分離独立運動の行方 二極化する運動
3. 学会等名 国際政治学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 阿部和美
2. 発表標題 乖離する市民社会とディアスポラ パプア分離独立運動の事例から
3. 学会等名 第22回アジア政経学会定例研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 ABE Kazumi
2. 発表標題 The Obstacle to Peace in Papua: How to secure freedom from fear for the Papuan people
3. 学会等名 第5回アジア未来会議（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 阿部和美
2. 発表標題 ポスト権威主義体制下インドネシアにおけるパプア分離独立運動の行方
3. 学会等名 国際政治学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Abe, Kazumi
2. 発表標題 Japan-Indonesia Relations in Post-Reformasi: From Perspective of Japan 's ODA
3. 学会等名 The 6th JSA ASEAN Conference（国際学会）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 多賀秀敏、奥迫元、峯田史郎、小泉悠、竹村卓、福田忠弘、中村香代子、山田満、谷山博史、阿部和美、川嶋淳司、勝間靖、山本剛、秋葉忠利、鄭美香、川口徹、李起豪、その他4名	4. 発行年 2020年
2. 出版社 成文堂	5. 総ページ数 381
3. 書名 平和学から世界を見る	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------